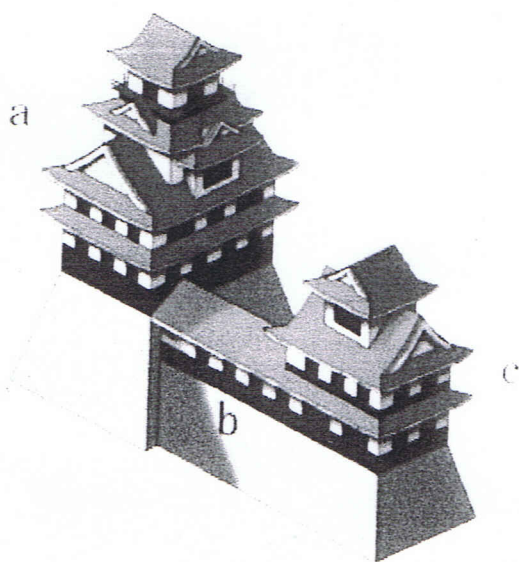


坂本城と

明智光秀

I. 坂本城の位置と構造

平成 22 年 5 月作成



坂本城を考える会

坂本城の位置

坂本城は下阪本に築城された。

東国から京都への荷物の上陸地点であった下阪本を押さえることで湖上交通・交易の確保を図り、坂本と延暦寺とのつながりを断ち切るため、坂本城は下阪本に築城された。

文献史料や考古資料から、坂本城は大津市下阪本の地にあったと考えられている。

この地に、織田信長の命により明智光秀によって坂本城が築城されたのは、東国から京都への荷物の上陸地点であった下阪本を押さえることで湖上交通・交易の確保を図ったこと、また坂本と比叡山延暦寺とのつながりを断ち切るためとされる。その後、坂本城は焼け落ち、豊臣秀吉の命により丹羽長秀によって再建されたが、湖南の要地として浜大津が浮上し、さらに秀吉は延暦寺に対して監視から保護へと政策転換したために、浅野長政により、坂本城は棄城され大津城へ移転したとされる。

すなわち、東国から琵琶湖の海運を使つての交易は、後に琵琶湖⇒浜大津⇒逢坂越⇒京都・大阪へのルートに変更されるまでは、琵琶湖⇒坂本⇒白鳥越・青山越⇒修学院（古道越）又は琵琶湖⇒坂本⇒志賀越・山中越⇒京都白川（今道越）のルートが用いられていた。



琵琶湖から京への海道





坂本城関係発掘調査位置図

第1表 坂本城跡関係発掘調査一覧

地点	検出遺構	出土遺物
1	礎石建物・掘立柱建物・石組溝・井戸・石組土坑・石垣	土師器・国産陶器・中国陶磁器・瓦・青銅製品・鉄釘・石製品
2	礎石	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
3	顕著な遺構なし	土師器・国産陶器・中国陶磁器
4	顕著な遺構なし	土師器・中国陶磁器(青磁)
5	顕著な遺構なし。表土下1.5mで砂礫層と湧水	
6	礎石・石組溝・石垣・石段	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
7	礎石・焼土	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
8	湖中石垣延長ライン	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
9	礎石建物・土坑・屈曲した石組溝(水路)	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨・硯
10	顕著な遺構なし	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
11	15世紀後半～16世紀前半をピークとした長方形屋敷割りの両側町	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
12	15世紀後半～16世紀後半の礎石・井戸など	土師器・国産陶器・中国陶磁器・銭貨
13	礎石建物・旧河道護岸石垣・石垣・石敷	土師器・国産陶器・中国陶磁器
14	掘立柱建物2棟(4×2間)	土師器・国産陶器・中国陶磁器
15	顕著な遺構なし	土師器・国産陶器・中国陶磁器
16	顕著な遺構なし	土師器・国産陶器・中国陶磁器
17	L字形の石垣	土師器・国産陶器・中国陶磁器
18	上層(江戸時代)石組溝・土坑、下層はそれ以前の礎石建物・土坑	土師器・国産陶器・中国陶磁器
19	礎石建物・ころがし根太使用の建物・井戸・石垣・石組土坑	土師器・国産陶器・中国陶磁器
20	顕著な遺構なし	
21	礎石・井戸・溝・土坑	土師器・国産陶器・中国陶磁器
22	土塁・溝・井戸・礎石など。	土師器・国産陶器・中国陶磁器

坂本城は明智光秀により下阪本の湖岸に築城された。

坂本城は明智光秀により下阪本に築城され、その位置は、北は旧藤ノ木川、南は信教寺川、東は琵琶湖、西は穴太から坂本に向かう下道の線の間と推定される。

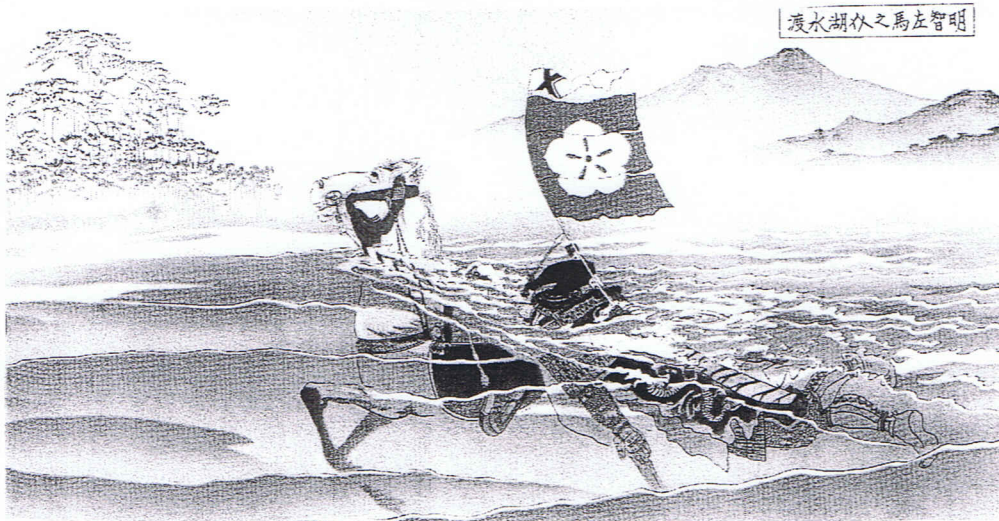
- 文献史料から、坂本城は明智光秀により下阪本に築城された。
 - 「1571年、織田信長、明智光秀を坂本城に居さしむ」1)
 - 「明地(智)十兵衛志貴(賀)郡拝領、居城坂本」2)
 - 「1571年、明智、坂本に城を構え、山領を知行」3)
 - 「1572年、明十(光秀)、坂本において普請」4)
 - 「1572年、明知(智)十兵衛、山王の敷地に新城を普請」4)
 - 「明智は、都から四里ほど離れ、比叡山に近く、近江国の大湖のほとりの坂本と呼ばれる地に邸宅と城砦を築いた」5)
 - 「明智光秀城址、東坂本に在り」6)
- 考古資料から、坂本城の範囲は、下阪本の中で、ほぼ北は旧藤ノ木川、南は信教寺川、東は琵琶湖、西は穴太から坂本に向かう下道の線の間と推定され、本丸は湖に面した水城で、二の丸・三の丸があり、内堀、中堀、外堀があったと推定される。7、8)
 - 「西外堀は両社・酒井神社の西側に水路が残存」(但し遺構未確認、もう少し狭いか)
 - 「北外堀は旧藤ノ木川」(南面する石垣あり)
 - 「南外堀は信教寺川が堀の名残」
 - 「中堀は南大道町・北大道町付近の道路」(堀を埋めたとの伝承)
 - 「内堀は東南寺川河口の三角州の最先端部分を囲む」(国道161号線西側に石垣)
 - 「小字名として浄願寺、阿弥陀寺の名が残っているが、この二箇所の寺は北国街道沿いの城下への入り口に配置されたものであろう」
 - 「五期の遺構と二層の焼土が確認され、五期の遺構とは、古くから、1. 坂本城以前の遺構(焼失)、2. 光秀期の坂本城遺構(焼失)、3. 復旧時(羽柴秀吉期)の坂本城遺構、4. 一部改築時遺構、5. 移転後から江戸期の遺構」
- 後に坂本城は増・改築されたと考えられている。
 - 「1580年、惟任日向守、坂本の城を普請」(増・改築工事と推定)4)



本能寺の変後、坂本城は焼け落ちた

文献的にも考古学的にも、坂本城は焼け落ちたことが認められている。

- 築城10年後、本能寺の変後の明智光秀の敗死に伴い、坂本城は焼け落ちている。
 - 「1582年、光秀の娘婿、明智秀満は、瀬田や大津で秀吉軍に妨げられながら、湖に馬を乗り入れ、坂本城に入った。坂本城焼亡」 9)
 - 「1582年、今日山にて見れば比叡山の東方大焼、必定坂本焼城」 10)
 - 「1582年、坂本の城、天主放火」 4)
 - 「光秀の妻女ともろともに自害し、城に火を放つ」 11)
- 考古学的にも、明智光秀の築城した坂本城は焼け落ちたことが認められている。 8)
 - 焼失した光秀期の坂本城遺構が発掘されている
 - 坂本城跡から、光秀の時代の赤褐色の被災した瓦が投棄された状態で出土
 - 被災し変色した鬼瓦が、井戸や石組土坑中から焼土とともに出土
 - 坂本城炎上時に生じたとされる2種類の色調の瓦が出土



(『国史通覧 大和櫻』より)



明智左馬之助駒止めの松



234

234



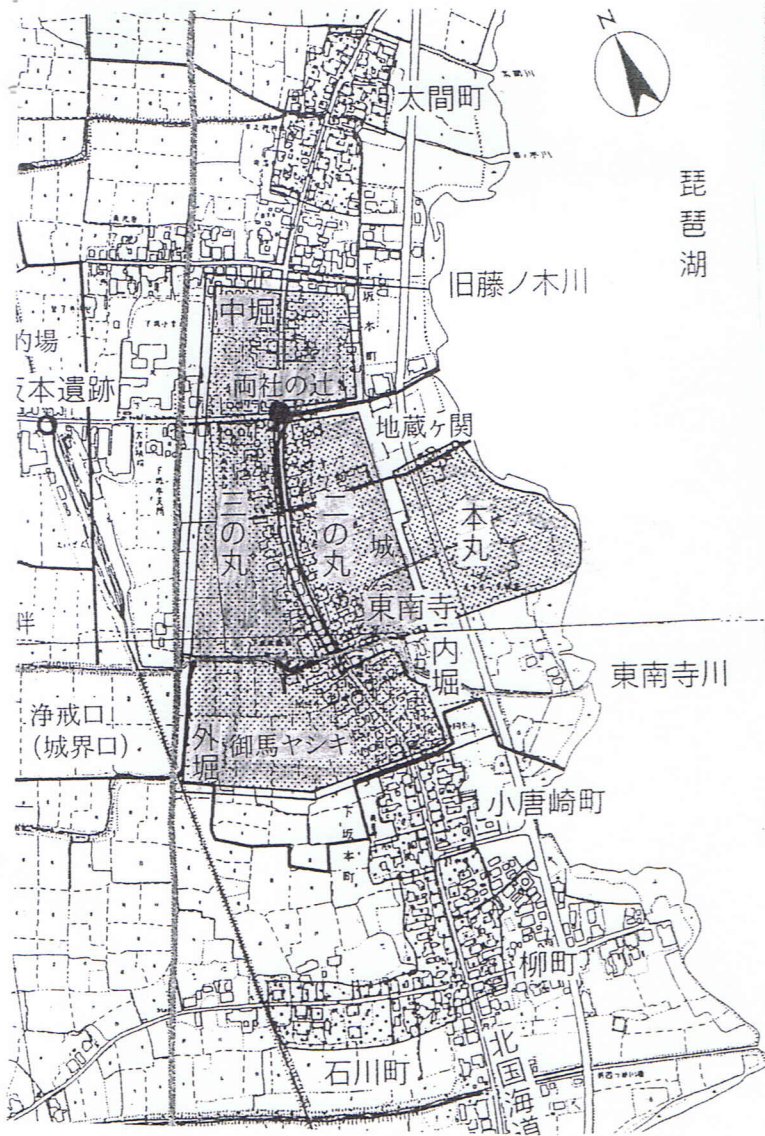
被災した瓦

271

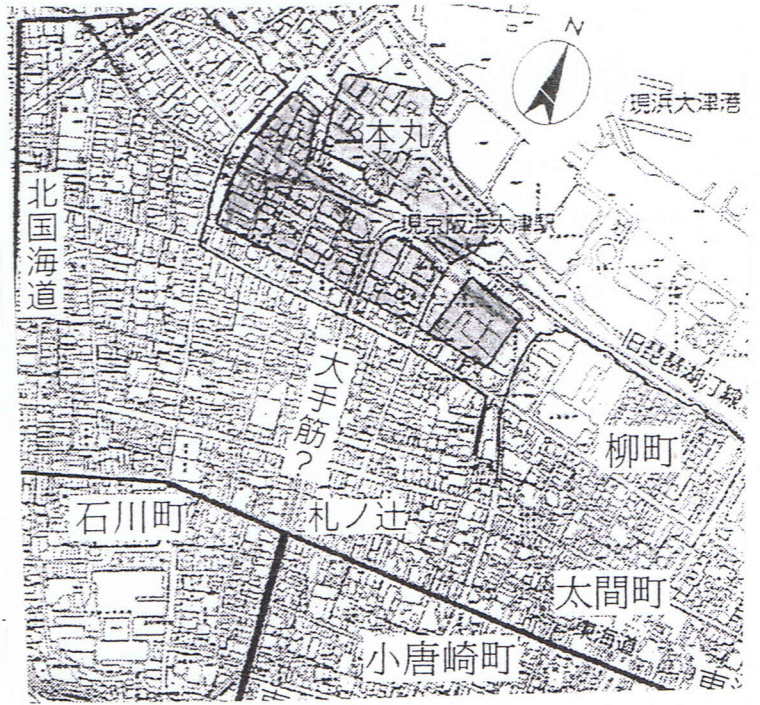
坂本城は丹羽長秀により再建、浅野長政により棄城、大津城へ移転

坂本城は丹羽長秀により再建され、浅野長政により棄城、大津城へ移転された。

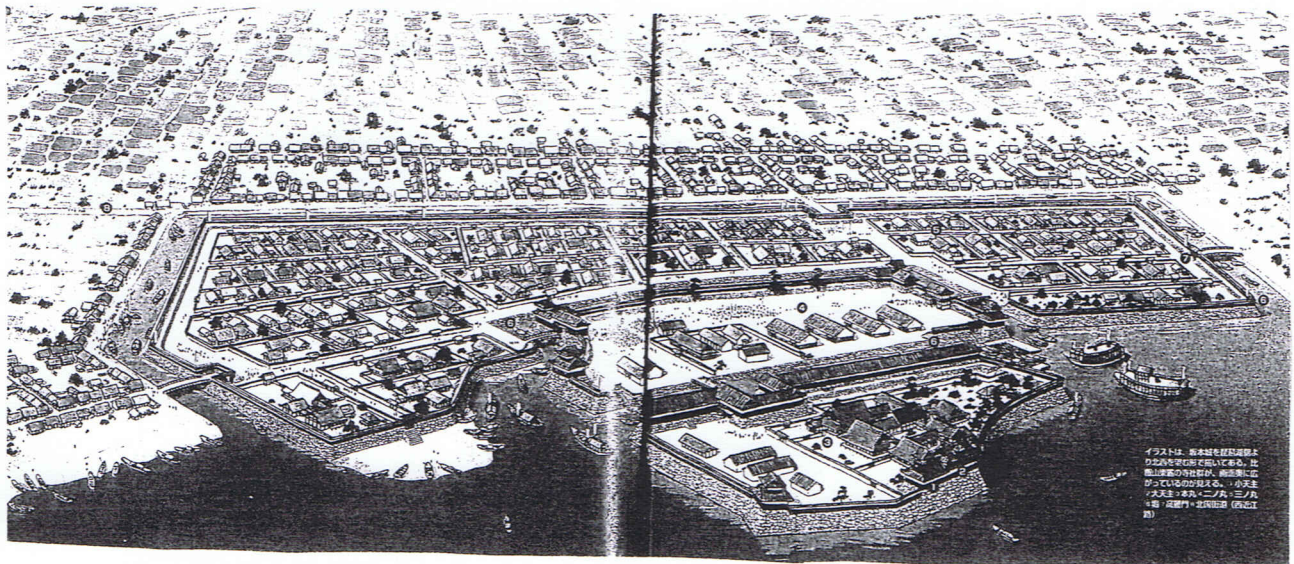
- その後、すぐに坂本城は丹羽長秀により再建されている。
 - 「1582年、丹羽長秀が跡地に坂本城再建」4)
 - 「1583年、坂本城にて秀吉による近江の知行割り実施」10)
 - 「1583年、坂本城に諸大名や諸武将がぞくぞくと礼門に訪れた」10)
- さらに4年後、坂本城は棄城された。
 - 「1586年、棄城」10)
 - 「1678年、黒川道祐が下阪本を通りかかった際に、坂本城が七本柳の二町ほど北にあったと聞いた」12)
 - 「1734年、坂本城の跡地に一寺を建てたのが「今津堂（東南寺）」であり、古城地の時の石垣、今に存す」11)
 - 「坂本城跡に堂建てる。今津堂という」13)
- 坂本城は廃城に伴い大津城へ移転された。
 - 「その城（坂本城）を遷し、大津今の十四銭が屋敷の外、湖水の辺に築けり」12)
 - 「光秀の妻女ともろともに自害し、城に火を放つ。…その後、城を払って大津の浜に移す」11)
 - 「坂本城主に杉原家次、次に浅野長吉（長政）が坂本城主から大津城主へ」14)
 - 「1596年、京極侍従（高次）大津の城へ御移り候」15)
- 下阪本の町名と浜大津の町名とが一致することも、坂本城から大津城への移転が行われたことを示すと考えられている。
 - 「坂本の城を大津に移しし時、人家も亦従うて移る、小唐崎、絶間（太間）町、今にその跡坂本にあり」11)
 - 「坂本町・小唐崎町・柳町・太間町・石川町等の町名、慶長五年已後大阪（大津）落城の後坂本民家この地へ引き移る」16)
 - 「大津町儀、天正年中坂本落城の以後、人家大津へ引越し住居せしめ候」17)
- 大津城がいつ築城されたかについての明確な資料はないが、文献史料から、坂本城の廃城と大津城の築城とは同時期、むしろ同時であったと考えてよいのではないかと。
 - 「1586年1月、秀吉の坂本下向、同年2月と5月には大津下向」4) 19)
 - 「坂本城廃城して大津引上」13)
- 坂本城の廃城に伴い、坂本城の資材が大津城へ移転されたとする研究がある。
 - 「浅野長吉（長政）の大津築城に伴い、坂本城はその遺材を移転、廃城と化した」21)
 - 「天正14年（1586）、坂本城の資材等の大部分は大津城へ移転されて、築城から約15年余りで廃城と化した」8)



坂本城



大津城



イラストは、坂本城を模型撮影より
の写真を参考に描いてある。地
形は実際の地形から、城跡には
ついでに描かれている。小丸
・本丸・二の丸・三の丸
・堀・石川町・北国海道 (西口
側)

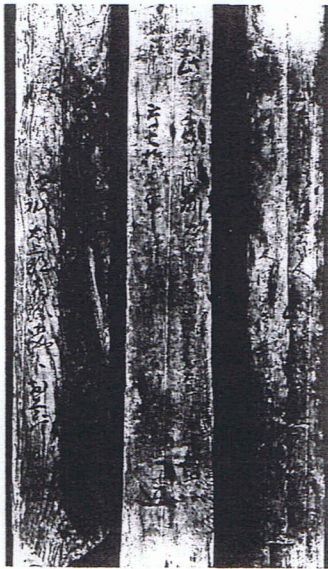
坂本城の天守は大津城へ移築されたのではないか？

坂本城の大津城への移転に伴い、その天守も移築された可能性がある。

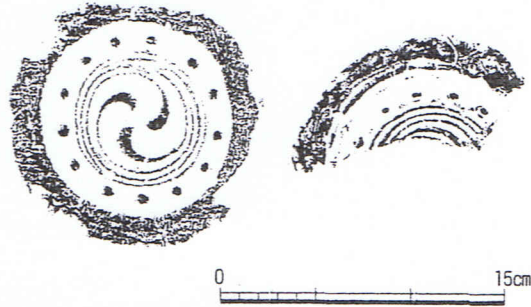
- 坂本城は大津城へと移転されたが、その際に大津城は坂本城をベースに築城されたと考えてよいのではないか。
 - 「湖に突き出した本丸や外堀・中堀・内堀など、坂本城と大津城の縄張りは類似」18)
 - 「大津城の堀は琵琶湖の水を引き込めない深さで、空堀であったか河川の水を引いたことも考えられる」19)、ことから、大津城の縄張りは坂本城に合わせたことが考えられる
 - 「大津城の本丸は元々湖であり、埋め立てにより造成されている」19) ことから、大津城の縄張りは坂本城に合わせたことが考えられる
 - 「天守の位置は、大津城が本丸の中央部に、坂本城が本丸の北寄りにあった住居跡の南側付近にあった」19) とされ、両城の天守は同じ位置にあった可能性がある
 - 「大津城の本丸の横（東側）には家臣（佐々、鐘崎、安養寺）の住居があった」20) とされ、坂本城の本丸横（南側）にも家臣の住居があった可能性がある
 - 坂本城廃城、大津城築城とも同一人物(浅野長政)が同時期(1586年)に実施している
 - 坂本城のあった下阪本と大津城のあった浜大津とはすぐ近傍である
- 坂本城の天守も大津城へ移築された可能性がある。
 - 坂本城の瓦の出土位置から、「住居は瓦葺きではなく柿葺きまたは檜皮葺きであり、瓦葺きの主要な建物を想定すると『天主』などの主要な建物が該当すると思われ」7) と、坂本城跡出土の瓦は天守の瓦であろうとされる
 - 「坂本城跡からは赤褐色の被災した瓦と灰黒色の瓦が井戸などに投棄された状態で出土し」8)、これらは光秀の時代のものと考えてよいことから、再建時の長秀の時代の瓦の出土はほとんどみられないようであり、大津城築城にあたって、その瓦の一部は、再建坂本城の瓦が転用されたのではないか
 - 「大津城跡出土の瓦と坂本城跡出土の瓦とは同汎のものがある」22)、23) ことから、坂本城から大津城へという時期のずれを考えれば、大津城築城にあたって、その瓦の一部は、丹羽長秀による再建坂本城の瓦（明智光秀による創建坂本城の瓦を含むか）が転用されたのではないか
 - 「坂本城の天守は大津城へ移転された（後に膳所城へ）」との研究がある24)
 - 「坂本城の城門は、来迎寺の門に移転された」24) とされる
 - 坂本城の石垣の石は下阪本の城跡地にほとんど残されておらず、大津城築城にあたって利用されたのではないか
- 大津城の天守は彦根城へ移築されたことが証明されている。
 - 「1601年、大津御城の天守崩始」15)

- 「大津城の天守は彦根城へ、その他の資材は膳所城へ移転された」 19)
- 「(彦根城) 天主は京極家の大津城の殿守 (天主) 也、…棟梁浜野喜兵衛」 25)
- 彦根城天主の隅木に「慶長 11 年 6 月 2 日」の年号と「喜兵衛」の名前の墨書 26)

坂本城 (丹羽長秀再建) は築城 4 年で廃城となっており、焼け落ちた訳でもないことから、木材・瓦等の資材はまだ新しく、十分に転用可能であったと考えられる。特に瓦については、江戸期に棧瓦が発明されるまで用いられていた本瓦は貴重であり、城の移転にあたって当然転用したことが考えられる。坂本城の廃城と大津城の築城とが同時期に同一人物により行われ、両城とも水城で縄張りが似ていることなどから、大津城は坂本城をベースに築城されたと考えられ、坂本城の天守は大津城へ移築され、さらに彦根城へと移築されたと推定される。



慶長墨書の隅木材



左：坂本城跡出土軒丸瓦、右：大津城跡出土軒丸瓦

大津城跡出土の瓦と坂本城跡出土の瓦とは同范



浅野長吉 (長政) 像

坂本城の構造

文献史料や考古資料（出土瓦など）から、坂本城には天主があり、小天主と大天主の二つがあったと考えられているが、その詳細な構造に関する資料はなく不明である。

坂本城は水城

坂本城は琵琶湖に面した水城であった。

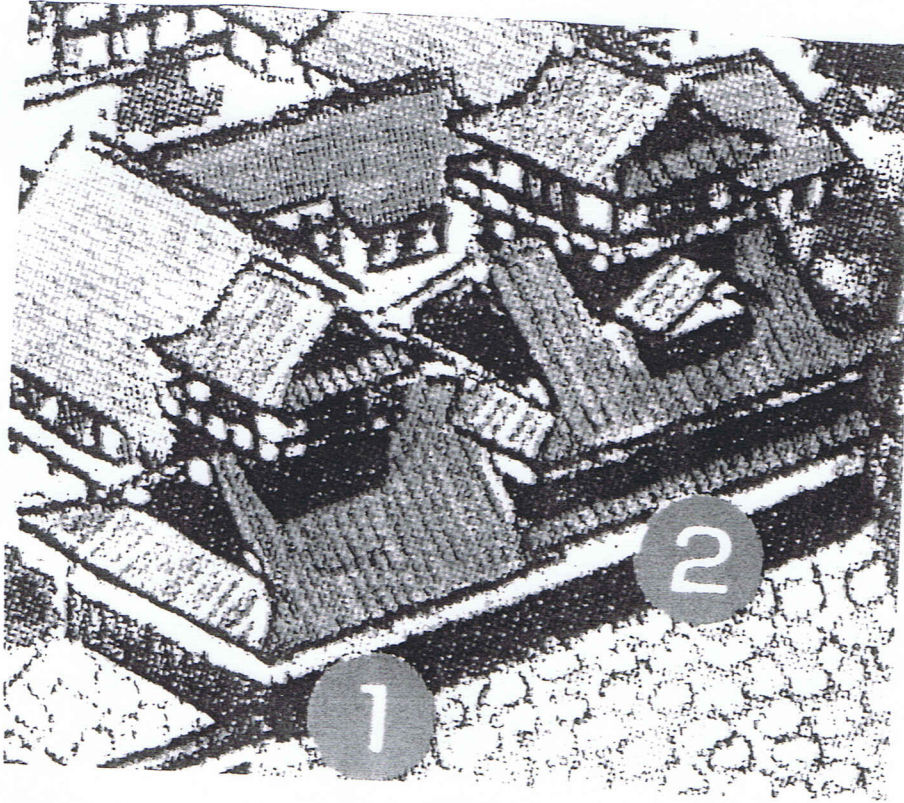
- 文献史料からも考古資料からも、坂本城は水城であった。
 - 「から崎の一つ松一見し、坂本の町に一泊、そのまま明智殿城を漕ぎまわり」 27)
 - 「御座船を城の内より乗り、坂本城から安土へ向かう」 28)
 - 「坂本城の茶会が浜の方の御座敷で行われた」 28)
 - 先に示した考古資料から、湖に面した天守閣、外堀・中堀・内堀の存在 7、8)

坂本城には天守があった

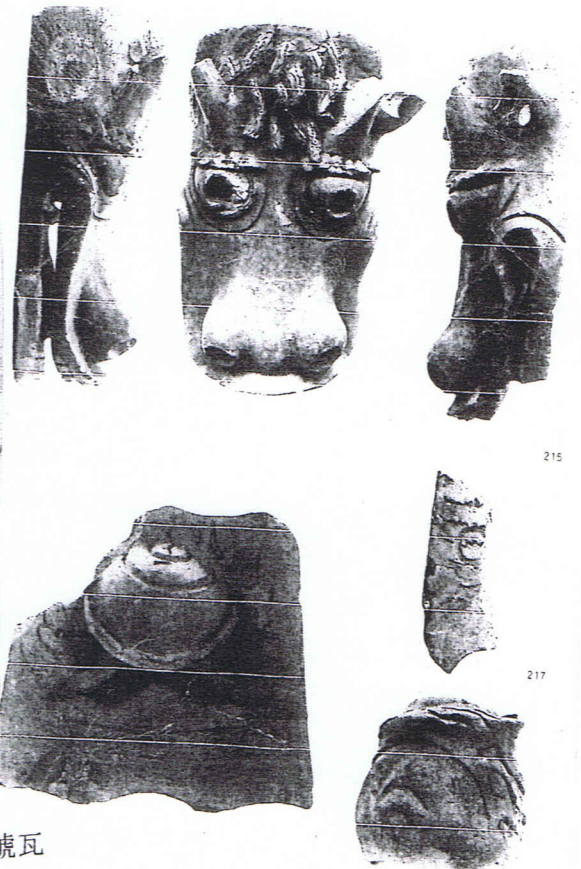
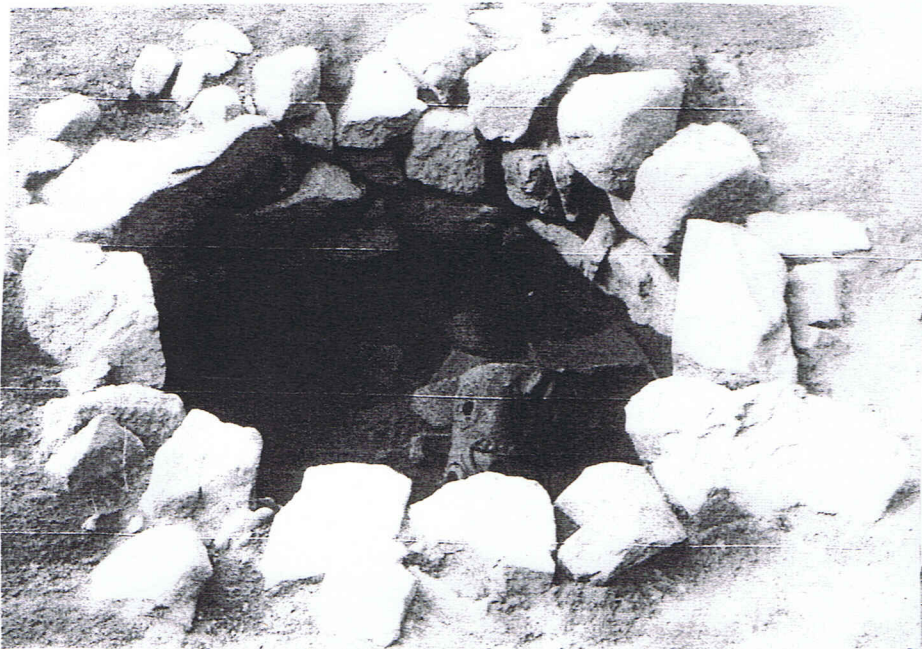
坂本城には、文献的にも考古学的にも（大）天守があり、小天守もあったと考えられる。

- 文献史料から、坂本城には天守があったと推定される。
 - 「城中・天主の作事…驚目了」 4)
 - 「天主の下に立つ小座敷」 4)
 - 「小天主において茶湯あり」 4)
 - 「明智は坂本と呼ばれる地に邸宅と城塞を築いたが、それは日本人にとって豪壮華麗なものであった。…羽柴の軍勢が坂本城に到着したとき、多量の黄金を窓から海に投げ、最高の塔に立て籠もり、…塔に放火」 5)
 - 「最高の塔」という表現から、天守があった可能性 29)
 - 「坂本の城、天主放火」 4)
 - 「主殿にてしばらく相待す」 4)
 - 「高層の天主を中心にすえた、かなり豪壮な城だったらしい」 19)
 - 「坂本城には大小二つの天主（守）が築かれていた」 30)
- 出土瓦から、坂本城には天守があったと推定される 8)。
 - 「瓦葺の主要な建物を想定するならば、『天主』などの主要な建物が該当すると思われ、…とりわけ調査地の南側付近に『天主』が築かれていた可能性が極めて高い」とされる
 - 「鯰瓦や鬼瓦が出土し、特に鬼瓦は火を受けて赤褐色に変色し、被災した瓦が井戸や石組土坑中から焼土とともに処理された状況で出土していることから、発掘された建物の屋根に葺かれたものではない可能性が指摘されている（建物は柿葺きか檜皮葺きと推定）」 - これらは焼け落ちた天守の瓦ではないかと推定される。
 - 「2種類の色調の瓦が出土しているが、これらは坂本城炎上時に生じたものと理

解でき、一つは火災時に屋根上に長時間存在、一つは短時間の内に屋根から地上に落下したものと指摘されている」—これらは焼け落ちた天守の瓦ではないかと推定される。



中井 均 『俊英 明智光秀』より



井戸から発見の鯰瓦

坂本城の天守は四層五階か？

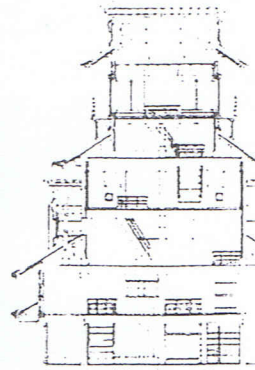
坂本城の天守は、彦根城や大津城の構造から四層五階であったのではないか。

●坂本城の天守は四層五階であったのではないか。

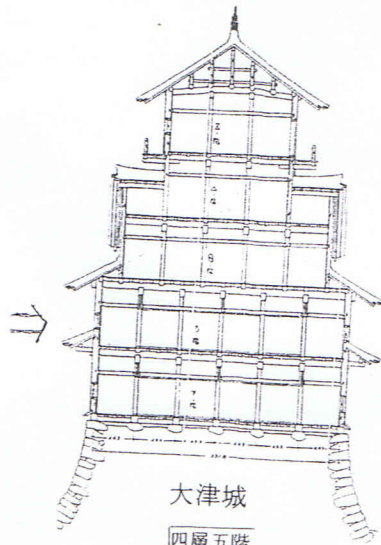
- 「坂本城には小天主や櫓があったようで、櫓が二層二階、小天主が三層三階とすれば、大天主（天守）は四層四階以上であった可能性があり、天主は三層三階以上と推定」 31)
- 「彦根城の前身建物である大津城の天主は四層・五階」 19)
- 「彦根城の天主は、四層・五階の大津城の天主を少し小さくした三層・三階」 32)
- 大津城の天守の木組が推定復元されている 33)

坂本城から大津城へ城の移転が行われ、城の縄張りなどから坂本城がそのままの形で大津城へ移築されたと考えられることから、天守も移築されたことが推定され、また大津城（四層・五階と推定されている）から彦根城（三層・三階）へ天守の移築が確認されていることから、坂本城の天守は大津城と同じ四層・五階であったのではないか。

江戸時代又はそれ以前に築かれた天守で、現存するものは12あり、その中で四層五階の天守として高知城のものが残されている。これらから、坂本城の天守の構造を考えるのに、彦根城をベースに高知城を参考に推定可能ではないかと考えられる。



高知城



坂本城

大津城

四層五階



彦根城

三層三階

参考文献

- 1) 『東叡山日記』
- 2) 『石川忠総留書』
- 3) 『年代記抄節』、大日本史料
- 4) 『兼見卿記』、史料纂集
- 5) 『フロイス日本史』、完訳フロイス日本史 3
- 6) 『倭名類聚抄・日本地理志料』、京都大学文学部編
- 7) 『比叡山焼き討ち前後の城砦の調査』、季報大津市史、吉水眞彦
- 8) 『坂本城跡発掘調査報告書』、大津市教育委員会
- 9) 『川角太閤記』
- 10) 『多門院日記』、増補続史料大成
- 11) 『近江輿地志略』、寒川辰清編
- 12) 『近畿歴覧記－三井行程』、新修京都叢書、黒川道祐
- 13) 『淡海録－古今御城記』、近江資料シリーズ 4
- 14) 『浅野家文書』
- 15) 『園城寺古記』、東京大学史料編纂所
- 16) 『大津珍重記』
- 17) 『大津町覚』、国立国会図書館所蔵
- 18) 『大津城の研究』、田中宗太郎
- 19) 『大津の城』
- 20) 『大津籠城と京極氏』
- 21) 『近世前期における城郭遺跡について』、史想、第 20 号、1984、吉水眞彦
- 22) 『戦国の大津 天下統一の夢 坂本城、大津城、膳所城』
- 23) 『かわら 瓦からみた大津史』
- 24) 『坂本城誌』、津田幸種
- 25) 『井伊家年譜』
- 26) 『彦根城墨書銘』
- 27) 『島津家久君上京日記』、鹿児島県史料
- 28) 『天王寺屋会記』
- 29) 『近江戦国の城』、吉水眞彦
- 30) 『近江の城』、淡海文庫、中井均
- 31) 『滋賀の戦国期城郭』、駒沢大学史学論集、塚本晋
- 32) 『彦根旧時記』
- 33) 『国宝彦根城天守・附櫓及び多聞櫓修理工事報告書』